

畜試情報 No.37

福井県畜産試験場・奥越高原牧場・嶺南牧場

企画支援室



ヒツジが生まれました！

なかよしとんがり牧場で、今年ヒツジの子が2頭（オス1頭、メス1頭）誕生しました。どちらも健康に生まれ、順調に成長しています。オスのジョンは、母乳の出が不十分であったため、人工哺乳をしましたが、元気に育っています。生後1か月ごろから放牧をしており、子ヒツジも牧草を食べるようになりました。



メリー

マリー



サニー

ジョン

マリー

生年月日：令和7年2月26日

性別：メス

母親：メリー

ジョン

生年月日：令和7年3月10日

性別：オス

母親：サニー

▲生まれた時の様子

メリーとマリーは、現在六呂師高原に新たに整備された「ROKUROSHI ふれあいパーク」で放牧しています。



◀放牧の様子

ヒツジの毛刈り体験を行いました！



▲実演の様子

▼体験の様子



4月26日(土)にひつじの毛刈り体験を行いました。福井市足羽山動物園の方に毛刈りの説明、実演をしていただきました。参加者の皆さんはプロの技を見学した後、実際に毛刈りに挑戦しました。38組100人の方が参加し、楽しい体験となりました。



抗ミューラー管ホルモン（AMH） を活用した乳牛未経産牛の採胚技術

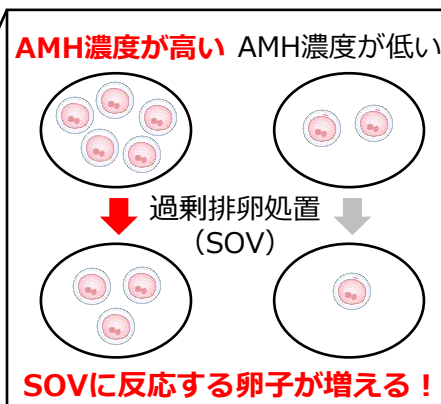
乳用牛群の改良には、高能力牛から受精卵（胚）を多く回収し、他の牛に胚移植して資質の高い子牛を生産することが効果的です。より多くの受精卵を回収する方法として、未経産牛の採胚技術が注目されています。

今回、未経産牛の血液に含まれる抗ミューラー管ホルモン（AMH）濃度を指標に、効率的に胚を回収する技術を検証しました。

AMHについて

ヒトでは卵巣に含まれる卵子数の予測に利用される指標です

↓
AMH濃度が高い牛の選抜が、採胚成績の向上につながるのか検証しました



AMH濃度 (ng/ml)

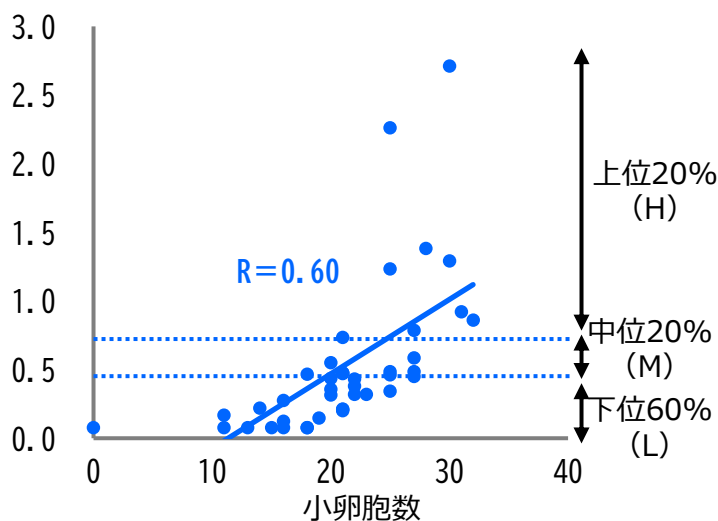


図1 AMH濃度と小卵胞数との関係

(個/頭)

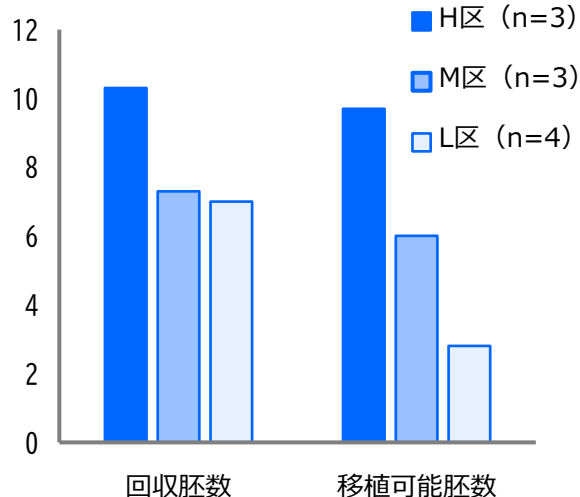


図2 AMH濃度と採胚成績との関係

未経産牛の血液中AMH濃度と小卵胞数との間に相関が認められました。そこで調査した牛をAMH濃度が高い順に分類し、3区の評価指標（H、M、L区）を設定しました（図1）。

この評価指標をもとに未経産牛の採胚成績を比較したところ、AMH濃度が高いH区で回収胚数、移植可能胚数が高い結果となりました（図2）。

AMH濃度による乳牛未経産牛の選抜は採胚成績の向上に利用できます



ハウスで福地鶏雄の肥育試験を行いました

ハウス鶏舎（6羽・10羽/m²）とウインドウレス鶏舎（10羽/m²）で福地鶏雄を28日から120日齢まで肥育し、発育成績や産肉や肉質の成績、鶏舎内環境の比較を行いました。（試験期間：R6年6月～9月）

結果

■ 鶏舎内環境

ハウス鶏舎はウインドウレス鶏舎に比べ平均温度が1℃程度高くなり（図1）、最高気温は40℃近くまで上昇するなど暑熱の影響をより強く受けました。

■ 発育成績、生産性

育成率は鶏舎間で変わらず、悪癖の発生もみられませんでした。暑熱の影響もあり生体重および産肉量ではハウス鶏舎がウインドウレス鶏舎に比べ低く、飼料要求率や生産費は高くなりました（表1）。

■ 飼養密度

飼養密度で発育成績や肉質に差はないことから、雄の肥育では福地鶏飼養マニュアルである6羽/m²ではなく、日本農林規格の10羽/m²で飼養できることが分かりました。

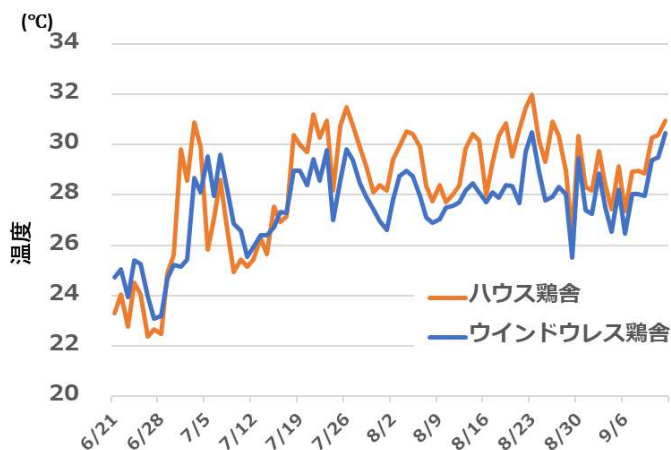


図1 平均舎内温度

表1 発育成績、生産費

区分	114日齢 生体重 (kg)	産肉量 (kg)	飼料 要求率	生産費※ (円/1kg肉)
ハウス鶏舎 6羽/m ²	2.18	0.97	4.58	1,680
ハウス鶏舎 10羽/m ²	2.22	0.97	4.54	1,693
ウインドウ レス鶏舎	2.52	1.09	3.60	1,366

※生産費は元雛費、飼料費、処理費、薬剤費、光熱費の合計

今後は以下のような課題に取り組んでいく予定です

- ・生産コストの削減
- ・暑熱対策
- ・福地鶏の遺伝的改良



牛の皮膚糸状菌症(真菌症)対策

嶺南牧場で行っている皮膚糸状菌症対策を紹介します

牛の皮膚糸状菌症とは？

- ・真菌症とも呼ばれる
- ・カビの一種 *Trichophyton verrucosum* が原因
- ・目の周りに多く発生、毛が抜けて灰白色のフケが出る
- ・接触で感染、人にもうつる



対策① 治療 殺虫剤＋油状液体

カーバメイト系殺虫剤と油状液体を 3 : 7 の割合でまぜたものを毎日患部に塗布



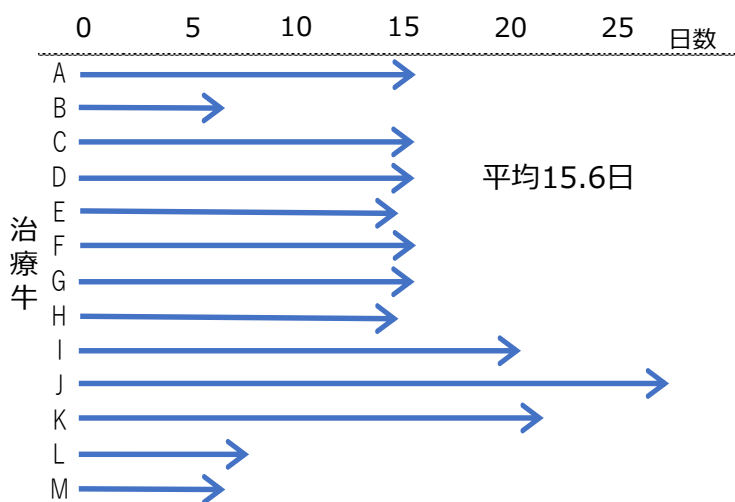
対策② まん延防止策 鉄柵拭き取り

糸状菌は金属部分にいますと言われているため、逆性石けんを説明書の“畜舎の消毒”の希釈倍率で薄めたもので週1回拭き取り



治療開始後 7日から28日で治癒しました

治癒するまでの日数



今後は省力化の取組みとして、

- ・治療の回数や間隔を減らす
- ・鉄柵の拭き取り→消毒液の噴霧に変更

これらの影響について検討する予定です

2週間で治癒した子牛の例



治療開始前

目の周囲と鼻先に病変



1週間後

黒い毛がうっすら生えてきました



2週間後

治りました

放牧肥育試験の目的

- ・市場から多様な牛肉（特に赤身肉）のニーズが高まっている
- ・肥育農家から褐毛和種（あか牛）放牧肥育を行いたい要望がある

令和6年6月より畜産試験場で放牧肥育試験をはじめ、2年目に入りました

放牧試験の概要

- ・供試牛：褐毛和種（去勢1頭：R6.5月導入、去勢2頭：R6.10月導入）
（雌1頭：R6.5月導入）
黒毛和種（去勢2頭：R6.5月導入）
- ・試験期間：生後9ヶ月齢より試験開始 肥育終了予定 27～30ヶ月齢
- ・濃厚飼料給与量：通常肥育の80% あか牛には酒粕も給与



放牧の様子



GPS装着 行動を調査



体測の様子

放牧を始めて約1年経過し、黒毛和種・褐毛和種ともに増体は概ね良好です。令和6年5月導入牛は秋に出荷予定です。

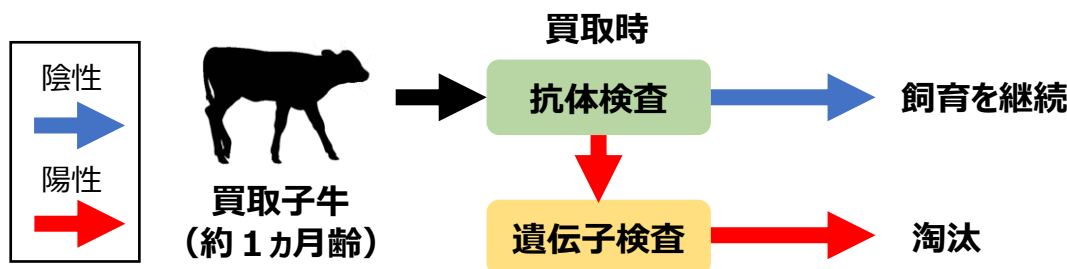


奥牧でのBLV検査体制を変更しました

牛伝染性リンパ腫は牛伝染性リンパ腫ウイルス（BLV）の感染によっておこる牛の病気です。牛伝染性リンパ腫にはワクチンや治療法がなく、吸血昆虫で容易に感染が拡大します。そのため、感染拡大を防止するために感染牛の確実な摘発が重要です。奥越高原牧場ではBLV感染牛を確実に摘発するために、買取子牛に対して行っているBLV検査体制を見直しました。

これまでの買取時のBLV検査

買取時に抗体検査を行い、抗体陽性であった牛のみ遺伝子検査を行っていました。

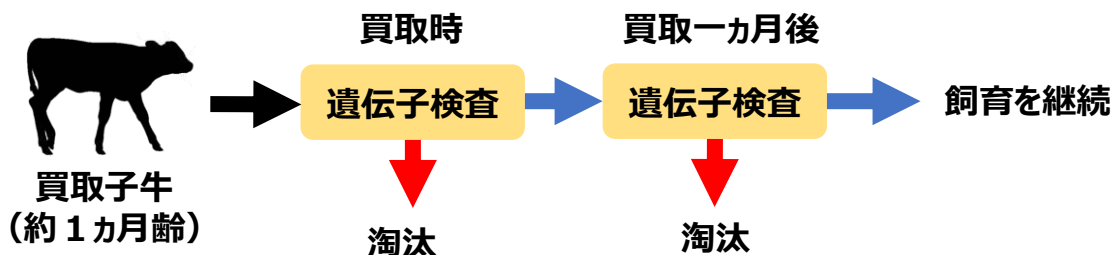


抗体検査だと、抗BLV抗体価が十分に上がっていない感染牛がいた場合、検査をすり抜けてしまう可能性があるのでは？



変更

新たなBLV検査体制



遺伝子検査では感染から約1ヵ月後にウイルス遺伝子を検出できます。そこで、買取時に遺伝子検査を行うことで出生時に感染した牛を摘発できるようにしました。さらに、買取1ヵ月後にも遺伝子検査を行うことで、買取直前に感染した牛も見落とさなく摘発できるようになりました。



今後もより効果的な検査体制となるよう、見直しと検討を行っていきます。

